第4章
全体のまとめ

１．格差拡大を容認しても大丈夫なのか

「格差の何が悪い」の真意

小泉首相・・・経済効率のために不平等が増えてもやむをえない
「成功者をねたんだり、能力のある者の足を引っ張ったりする風潮を慎まないと、
社会は発展しない」

経済効率のためには格差拡大はやむをえないのか

・「効率性と公平性のトレードオフ」
　→格差の拡大を容認しなければ、経済効率を高めることはできない
・「収穫逓減の法則」
　→ある要素を高めるほど、その期待できる効果は逓減する

公平性を犠牲にすることが必ずしも効率性を高めるとはいえない

２．貧困者の増大がもたらす矛盾

貧困者の増大は社会にとってもマイナス

１．経済効率

日本経済の活性化にマイナス

２．人的資材のロス

　貧困者が失業者であれば、人材を有効に活用していないといえる

３．犯罪の増加

劣等感から人を憎み、嫉妬を感じる
→犯罪が増え、社会を不安定に

４．社会の負担の増加

貧困者増→経済援助負担も増

５．倫理的問題

高所得者と低所得者の共存
→いじめが社会的に定着するおそれ

アメリカ社会における犯罪と災害のリスク

●ゲーテッドタウン：富裕者だけの町

1970～80年代　犯罪率増

原因：貧富格差の拡大

→壁に囲まれたコミュニティを作った

●ゲットー：貧困者の住むエリア

●ハリケーン「カトリーナ」2005.8

・富裕層　車で避難

・貧困層　避難できず多数の死者

→貧富の格差拡大がもたらす生命の危険

健康格差という新しい問題

貧困者は早死にし、お金持ちは長生き

食事の安全性への配慮

受けられる医療のレベル

アメリカ：自己責任の社会

→問題視する声が少ない

３．ニート・フリーターのゆくえ

ニートの現状

学校にも行かず、職にも就いていない若者
10年で20万人増加

＊10年以上前から無業の若者が相当数存在
・社会の中で顕在化した結果、
社会問題として認識されるように

＊30歳前後の壮年のニートの増加
・ニートのうちの半数が25～34歳
・ニートから抜け出せないまま
年を取ってしまっている

200万人超のフリーター

フリーターの定義
厚労省…自ら希望して正社員にならない人
内閣府…正社員でない人
（家事手伝い・求職中含む）

多くの者はやむを得ずフリーターに
・学歴の低い人たちがフリーターになる可能性高い
・フリーターの多くは正社員を希望
→一度フリーターになると
フルタイマーへの転換は難しい

・労働コスト削減
・勤労意欲・仕事の熟練度　低くみられる

フリーターを続けた場合の生涯賃金

正規労働者　　2億791万円
非正規労働者　1億426万円

→正社員の生涯賃金の半分しかない

フリーターとニートの将来

フリーター：所得が少ない → 一般的なライフスタイル難しい
ニート　　：親が死んだら貧困層へ

４．階層の固定化と人的資源の危機

格差拡大と階層の固定化

格差拡大の容認

→競争を活性化させ、経済効率を上げる

⇩ 不平等化の進行

親の階層を子が受け継ぐ

階層の固定化へ

⇩

競争の活性化が逆に抑えられてしまう

階層の固定化をどう考えるか

政治家：二世・三世議員多い

親の後援者・人脈・地盤を受け継ぐ

→能力が測りにくいため、無能な政治家でも自然淘汰されない

マイナス点

国民にとって人的資源の活用

危機的状況を引き起こされる可能性

階層の固定化・・・国家の将来にかかわる大きな問題

5. 格差をどこまで認めるのか

格差は必ず存在する

格差がゼロの社会

→世の中にはあり得ない

・有能な人⇔そうでない人
・頑張る人⇔怠ける人
・健康な人⇔生まれつきハンデのある人

能力、性格、健康・・・

どこまで格差を容認するか？

→個人の考え方、価値判断に作用される

格差に対する二つの考え方

●格差の上層と下層の差

・どこまで差を縮めればよいか

or 縮める必要がないのか

・貧困者の存在は容認

●下層が全員貧困でなくなるためには

・上層と下層の差の存在を認める

・貧困者ゼロの世界を想定

有能な人が報われる社会

→文化・技術・経済の発展に貢献

（例）アメリカ

社長の年収：一般社員の100倍超

有能な人・頑張った人には高い報酬

・勝者と敗者→敗者をどう扱うか

・機会の平等が与えられていない人多い

どこまで格差を認めるか

→国民の判断（選挙のテーマ）

格差と企業の生産性

（例）トヨタの社長の所得

・アメリカの社長より相当低い

・一般社員との格差小さい

トヨタ：非常に効率の良い生産性

⇩

社長と一般社員の所得格差

→小さいほうがよいのでは？